

0-2 作業に焦点を当てた関わりによって地域交流を再開された外来血液透析患者の一例

○竹内 知仁¹⁾

1) 医療法人清生会 谷口病院 リハビリテーション科

Keywords: 訪問リハビリテーション, 役割, ADOC

【はじめに】

今回、心臓外科手術後に在宅で活動参加が制約されていた外来血液透析を要す事例に対して、訪問リハビリテーションにて作業に焦点を当てた関わりを行なった。本事例では、作業選択意思決定支援ソフト (Aid for Decision Making in Occupation Choice:以下 ADOC) と役割チェックリストを使用し介入した結果、作業機能障害の改善に至った経過を報告する。なお、本報告は本人及び家族に同意を得ている。

【事例紹介】

A氏は80歳代男性、妻と2人暮らしである。20歳代で妻と結婚し、石工に定年まで従事した。定年後は交通指導員や地域活動、老人クラブに参加していた。X年Y月にぶどう球菌菌血症、両側後頭葉出血性梗塞を発症し、末期腎不全にて血液透析導入となる。要介護5の認定を受けA病院のリハビリ入院を経て在宅復帰し、訪問リハビリ開始するも重症大動脈弁閉鎖不全症（大動脈弁置換術、僧帽弁形成術）、洞不全症候群（ペースメーカー留置）を発症する。手術後に在宅復帰し週2回、訪問リハビリ再開となる。末期腎不全のため週3回、外来血液透析通院中である。FIM107点（運動項目82点、認知項目25点）、HDS-R28点である。透析日、非透析日共に臥床時間が多くを占め通院以外の外出予定が乏しい状態である。

【作業療法評価及び介入方針】

A氏「妻と生活をしたいが今は何もできない」妻「運動をして歩けるようになって欲しい」と聴取した。ADOCは「家族交流：満足度3、遂行度2」「地域交流：満足度2、遂行度1」「園芸・グランドゴルフ：満足度1、遂行度1」を選択した。病前から妻や地域住民と従事し、指導的立場も担っていた。役割チェックリストは過去：ボランティア、友人、家庭の維持管理者、労働者、家族の一員、趣味人、団体組織への参加者。現在：家族の一員。将来：家庭の維持管理者、友人、家族の一員、趣味人と聴取した。A氏にとって家族の一員と家庭維持者の役割は非常に大切であり、その他役割はある程度大切であると聴取した。作業機能障害の種類と評価（以下CAOD）は57/112点（作業不均衡5/28点、作業剥奪19/21点、作業疎外15/21点、作業周縁化18/42点）を記録した。A氏は血液透析による生活形態と身体機能の変化に伴い作業機能障害を生じ、自己効力感の低下に繋がっていると考えた。そのため介入方針は妻との共同作業機会の確保と重要作業での役割の再獲得を目指し、自己効力感の向上を図ることとした。

【経過】

介入初期は朝食の準備に必要な動作練習、介入中期は屋外歩行とプランター園芸を行なった。介入後期はA氏が担当者に対してグランドゴルフを指導する中で、A氏の技術の振り返りを行なった。またパットゲームスターをA氏から教わる目的で、公民館での老人クラブに参加し地域住民との再交流を図った。介入再開から8ヶ月後、妻と一緒に朝食の準備やプランター園芸も継続され、来客に収穫した野菜を振る舞っている。また老人クラブでは病前指導したメンバーの活躍を喜ばれつつ、試合復帰を目標に参加を継続されている。要介護認定は要介護2へ変更となった。

【結果】

ADOCは「地域交流・家族交流・園芸・グランドゴルフ：満足度5、遂行度4」を選択した。役割チェックリストは現在：家庭の維持管理者、家族の一員、友人、趣味人。将来：現在に加えボランティア、団体組織への参加者と聴取した。現在認識している役割は全て非常に大切であると聴取した。CAODは29/112点（作業不均衡5点、作業剥奪10点、作業疎外8点、作業周縁化6点）を記録し、FIM115点（運動項目87点、認知項目28点）と改善傾向である。

【考察】

今回ADOCと役割チェックリストを使用しA氏から潜在化していた思いを引き出すことができ、事例にとって意味のある作業に従事する機会に繋がったと考える。また各重要作業で自身の役割を再獲得したことで、作業への満足度が向上したと考える。これらの経験がA氏の自己効力感の向上に繋がりを、これからも新たな作業に従事していきたいという希望に繋がったと考える。